

### サポーターからパートナーへのパラダイムシフトへの挑戦

柏葉 英美

#### 1. 看護から介護へ

私は看護師として働く中で、2度の大きな転機があったように思います。まず1度目は、看護師として、県立病院で働く中で、看護教員として働くチャンスをいただき、看護教育に携わったことです。当時の制度では、看護教員になるには1年間の厚生労働省の看護教員養成学校の研修を受けるか、厚生労働省から委託された教育機関または看護協会の研修を受ける必要がありました。そのため、私は、中学2年生の息子と小学校5年生の娘と夫を岩手に残し、千葉県に単身赴任しました。しかし、私は、多感な時期の息子と甘えん坊の娘が心配で、毎週金曜日、授業が終われば新幹線に飛び乗り岩手に帰り、日曜日に寝台列車で東京に戻り授業を受ける生活を約1年間続けました。この生活は、我が家の家計をかなり圧迫しましたが、JR 東日本の売上には大きく貢献したと思います。家族を犠牲にし、晴れて看護教員となった私は、岩手の看護師養成に貢献することにやりがいを感じていました。その7年後、再び病院に戻り、看護研究や学生指導、看護師の卒後教育、看護管理に携わり、勉強の日々を送っていました。そんな中、看護学校からの再オファーで、再び看護教員として働くことになったのです。私のポリシーは、「求められた場所で、最善を尽くす」でした。高校生の大学志向の時代の中で、大学の滑り止めで受験し入学してくる学生が多く、最初から県立二戸高等看護学院を目指して入学してくる学生が少ない状況は、入学時のモチベーションに課題がありました。そこで、私は、入学してきた学生が、この学校に入学して良かったと思える学校にしたいと考え、職員一丸となり学校作りに取り組み、充実した日々を過ごしていました。そのため、私の中には転職する理由は何もありませんでした。しかし、人生とは、面白いもので、看護しか知らない私が、社会福祉学部の教員になってしまったのです。これが、私にとって、2度目の大きな転機でした。看護から介護へのシフトチェンジでしたが、介護福祉士養成課程は、4年後の課程廃止が決まっていたのです。4年後の私はどうなっているのか、想像できませんでした。しかも介護はおろか福祉関係者とのつ

ながりもない状況の中で、不安だらけの毎日でした。ただひとつ、私にとっての救いは、実習開発室の阿部明子先生の存在でした。同じ看護職という事だけではなく、わからないことだら



けの私を支えてくれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。県大に着任してからの3年間は、自分の足元が定まらず、いつも右往左往していたように思います。特に、研究テーマである「自死遺族のグリーフワーク」の研究では、なかなか、研究を進めることができず、研究継続に対する行き詰まりが、私の迷走を加速させていたように思います。そんな中、県大が担当する認知症ケア学会で「認知症カフェ」をテーマにしたシンポジウムがきっかけとなり、研究テーマを「認知症ケア」にシフトさせることができました。この方向転換により、2017年に自ら「オレンジカフェさくらの会」を立ち上げ、認知症フレンドリー事業を展開したことは、社会福祉学部でやっていくという決意を強くしたきっかけとなりました。

#### 2. 認知症フレンドリー事業について

認知症フレンドリー事業は「認知症とその家族にとって、自分らしさを発揮し、社会とのかかわりを持つ場づくりと、認知症に対する情報発信の場とすることで、認知症の偏見をなくし、認知症になっても暮らしやすい地域をつくる。」ことを目指しています。

具体的な取り組みは、定期的な認知症カフェの開催、認知症セミナーや講演会、「ケアニン」映画上映会、VR 認知症体験会、高齢者に優しい図書館プロジェクト、本人ミーティングの実施、高齢者声かけ見守り訓練等を実施しました。特に、VR 認知症体験会は、いわて保健福祉基金の助成を受けて2018年度から岩手県内（滝沢・一戸・二戸・久慈・北上・一関）で実施している事業です。その目的は、「①VR 認知症体験を通して参加者自身が当事者意識を持ち、『自分自身がどうあるべきか』を考え、行動していくきっかけを作る。②認知症への偏見をなくし、認知症になっても住み慣

れた地域で幸せに暮らすことができる社会をつくる一員となる。③年齢、職種の違う人たちとともに学ぶことで、世代間交流ができ、それぞれの学びや気づきを得ることができる。」とし、600名の方が体験しました。

アンケート調査の結果、VR体験会の効果は非常に大きく、専門職であっても、体験前後の認識に差があり、1人称で体験することの効果が大いことが明らかになりました。この事業を通して地域とのつながりを持つことができ、研究だけではなく、地域貢献になったことは、大きな成果だったと思っています。

また、認知症フレンドリー事業を展開することで、見えてきた課題は、ダブルケアの問題、ヤングケアラーの存在でした。今後、この課題に対しても具体的な取り組みを検討していきたいと考えています。

#### 4. 最後に

介護福祉士養成課程を閉じて、私が社会福祉学部に残ったのには、2つの理由があります。まず1つは、「認知症ケア」にシフトし、その取り組みが軌道にのってきた事があげられます。2つ目は、福祉を学べる環境にいることは、地域包括ケアシステムが推進される中で、看護のはたすべき役割を学べると考えたからです。令和4年度から適応される看護師教育カリキュラム改正において、地域を視野に入れた取り組みや地域との連携に重きを置いた教育内容となっています。社会福祉学部にしたことで、地域課題に目を向け、地域を変えることで、課題を解決するという視点を持ったことは、私にとって大きな学びとなりました。また、当事者との関係においては、サポーターではなくパートナーであることの大切さに気づくこともできました。まだまだ、やり残した事だらけではありますが、今まで、時間がなくて取り組めなかったこと、やりたかったことに取り組んで行きたいと考え、準備しているところです。認知症フレンドリーコミュニティ構築のために、ダブルケアやヤングケアラーだけではなく、赤ちゃんボランティアや赤ちゃん先生、子づれ出勤、放課後デイなど、子育て世代にも目を向けた取り組みによって完成できると考え、私の妄想は膨らんでいます。子どもにも目を向けることができたのは、幼保課程のカリキュラムに携わることで、視野を広げることができたからだと思っています。

私にとって県大の教員生活は、あっという間の9年間でした。先生方や事務の方々に親切にいただき、

たくさん助けて頂きました。感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ、学びの途中ではありますが、今までの取り組みは継続して行っていくので、引き続きご指導いただければ幸いです。



認知症認知症セミナー（丹野智文氏とのセッション）



VR認知症体験会（県立二戸高等看護学院）



高齢者見守り声掛け訓練の様子